

毎年、巡ってくる命の萌えいずる、この素晴らしい季節の到来にあわせ、本日、ここに、関西福祉大学・大学院の第十七回入学式を挙行するに当たり、学長として一言ご挨拶を申し上げます。

本日の入学式には、

- (一) 大学院社会福祉学研究科修士課程の一名、
- (二) 大学院看護学研究科六名、
- (三) 社会福祉学部一二一名、
- (四) 看護学部一〇七名、

あわせて二三五名の、新入生の皆さんを迎えることができました。誠に喜ばしいことであります。

また、本日の入学式にあたり、衆議院議員 山口壮（やまぐち つよし）様、赤穂市長・豆田正明（まめだ まさあき）様、金光教教務総長 岡成敏正（おかなり としまさ）様をはじめ、多数の来賓のご臨席を賜りましたこと、ここからお礼申し上げます。

また、全国各地から足を運ばれました入学生のご両親、ご家族の皆様方には、ご列席をいただきましたことを深く感謝申し上げますとともに、ご子女のご入学をここからお祝い申し上げます。

まず、本学の設立から今日までについてお話します。

皆さんが入学された関西福祉大学は、赤穂市の多大なるご支援を得て、平成九年四月、社会福祉の単科大学として開学いたしました。

その後、平成十八年度には看護学部、平成二十一年度には大学院社会福祉学研究所（修士課程）、昨年四月には大学院看護学研究所（修士課程）を開設しました。

このように、関西福祉大学は、漸次、学部の拡大を進め、さらには、学部から大学院までの一貫した教育体系を整備して、有用な人材を地域に送り出すとともに、人材のさらなるレベルアップを支援することを通じて、地域の医療・保健・福祉の充実に貢献すべく、努力を重ねているところです。

次に、本学の建学の精神についてお話します。本学は、金光教の教義に基づき、「人間平等」「個性尊重」「和と感謝」を基本としています。

まず第一に、「人間平等」でありませんが、これは、「人間はみな大いなるはたらきに生かされる人間として平等であり、自分のいのちと同様に他者のいのちも尊重し、一人ひとりのかけがえないいのちを大切にし、人の痛みや苦しみを自分のことと感じ、すべての人を受け容れる寛容なこころを持つことが大切である」ということです。

第二に、「個性尊重」であります。これは、「人間は、それぞれ性格が違ふことで社会の役に立つことができる」。したがって、「一人一人の個性や役割の違いを理解しようとする豊かなこころを持ち、相手の立場に立って傾聴し、共感することが大切である」という意味です。

第三に、「和と感謝」であります。これは、「人は一人では生きていけない。あらゆる人やものにお世話になりながら生きて行く。そのような関わりの中で、感謝の気持ちが生まれるところ

に和も生まれてくる」。そして、「すべての人びとが、共に生きる世界を実現するためには、「和」（やわらぎ）のこころをもち、起こりくるありとあらゆることに「感謝」の気持ちを忘れてはならない」ということです。

本学に入学した学生諸君は、これを常に、記憶に留め、あらゆる行動の基本として欲しいと思います。

次に、学生生活のスタートにあたり、いくつか申し述べます。

まず、最初に、日本という国に生きる人間としての誇りを持つて欲しいということです。

平成二十三年三月十一日、東日本は、観測史上最大規模の地震に襲われました。その時のことに関して、在日外交団長・サンマリノ共和国・駐日大使であるマンリオ・カデロ氏は、次のように言っています。

「東日本大震災のような巨大な天災によって襲われた時には、・・・社会の規律が大きく乱れて、大規模な略奪や、目を覆うような混乱が、かならず起こるものです。

ところが、日本では被災者が冷静さを失うことなく譲り合って、日本のうるわしい高貴な国柄がまるで奇蹟のように現われました。

人々は、世界に、手本を示しました。これは、日本の二千六百年以上にわたる歴史が紡いできた美しい和の心によってつくられたものでした。人々はこのような尊い根を持っています。」

英文の原稿を大使館が訳したのですが、その意味すると

ころは十分に汲み取ることができます。

この国に、今を生きる人々は、若者を含め自信を喪失しているように思います。しかし、諸外国からは、そのように高く評価されていることを知り、誇りに思っていて欲しいと思います。

これからの日本を支えていく若者一人一人が、そのような意識を持つこと、それが今、一番大切なことだと思います。

次に、大学院社会福祉学研究科および看護学研究科に入学される皆さんに申しあげます。

修士課程では、仕事を持ちながら勉学する方もあるでしょう。その道は、決して楽なものではないと思います。しかし、福祉・看護の原理及び実践研究について深く学ぶ、二年間の教育課程を修了するならば、必ずや、これまで以上に地域社会に貢献できる人材となっているはずです。

さらには、広く、国際的にも活動できる基盤ができています。

今回の選択が自分のなすべき道であると堅く信じて、自らの新たな進路を切り開いて欲しいと思います。

次に、社会福祉学部及び看護学部の新入生の皆さんに申し上げます。

まず、第一は、私たちの大学は、社会福祉学部と看護学部から成り立っており、学ぶことには当然に違いがあります。しかし、福祉・看護の現場では、統合的なサービスが強く求められています。看護師であっても、社会福祉の豊かな知識が、逆に、社会福祉士であっても豊かな看護の知識を持って

いることが求められます。

このため、学部の見直しの過程で、社会福祉学と看護学の融合を深めるために、平成二十五年度からは、お互いの領域について学ぶことも出来るようにするとともに、専門職として必ず遭遇する「人間の生と死」について深く学ぶためのカリキュラムも充実させました。

いずれの学部に所属していても、お互いに、学びあうことを大切にして、知識を深める努力をして欲しいと思います。そのような学びができることが、本学の大きな特徴でもあることを、常に、忘れないで欲しいと思います。

第二に、大学生活においては、自分のまわりの様々な社会的な事象について、関心を広げて欲しいと思います。今、私たちの社会には様々な問題があります。差別、いじめ、虐待、家庭内暴力、家庭崩壊などなど、時には、耳を疑うような事件もあります。

目を転ずれば、東南アジアやアフリカなどの発展途上国にあつては、今なお、様々な問題があります。今、私たちの大学では、東南アジアにも大きく目を広げようとしています。県下の大学から構成される大学コンソーシアムひょうご神戸との連携の下に、路上生活する子ども達を支援する「フィリッピン・ストリート・チルドレン・サポートプログラム」を実施しており、毎年、おおよそ二十名の学生を派遣しています。この八月には、スリランカの障害児を支援するプログラムも実施されます。

福祉学・看護学を学ぼうとする君たちは、社会にある様々

な問題について、無関心であってはなりません。苦しむ人たち、悲しむ人たちとの関わりを持たず、傍観者であってはならないのです。

常に、関心をもって、日本のみならず、世界にも目を見開き、様々な社会的事象に学び、どのようにすれば良いのかを、常に、自分に問いかけ、考え実践することのできる人材となって欲しいと思います。

最後になりましたが、ここに多くの皆さんが集い、そして、これからの福祉社会を支えていく仲間として、新たに加わってくれたことを、改めて、心から感謝いたします。

ここに集った一人一人が、新たな出発点に立ったことを深く理解し、さらに、人間的に成長し、成熟するために相応しい目標を見いだし、その実現に向けて、真摯に努力し、社会に役立つ人材として育っていくことを願っております。

そのために、教職員全員が一丸となって、全力で支えていくことをお約束して、私の式辞といたします。

平成二十五年四月五日

関西福祉大学長 安井 秀作